

第22回日本免疫毒性学会学術年会 研究発表のご案内

<ポスターセッション>

9月10日(木) 14:40 - 15:25

演題番号: P-08 ○杉本 潤一郎

演題名: ラット TDAR 試験における病理組織学検査を含んだ免疫毒性評価

概要:

免疫毒性試験ガイドラインでは、標準的毒性試験において免疫系への影響が懸念された場合、TDAR 法の実施が推奨されている。今回、ラット TDAR 試験及び免疫関連臓器の組織化学検査を含む病理組織検査を行い、抗体産生能及び組織の形態学的な変化の評価を試みた。その結果、TDAR 法と同時に免疫組織化学検査を含む病理組織学検査を行うことは抗体産生能の評価に有用な知見を提供しうると考えられたため報告する。

<試験法ワークショップ「免疫毒性試験法 Q and A」>

9月11日(金) 14:05 - 16:05

演題番号: WS-03 ○大石 巧

演題名: 抗体産生能などバラつきの大きい免疫毒性データの評価事例

概要:

ICH:S8 ガイドラインでは、標的が特定されていない場合は追加の免疫毒性試験として TDAR 法が推奨されている。しかし、TDAR の抗体産生能データは個体差が大きく、評価が困難な場合が多い。ラットでシクロスポリン A を用いた我々の検討でも、大きな個体差により明らかな差を検出できないケースがみられた。そこで、我々は同じラットで病理組織学検査を行い、重要性に基づいた評価 (weight-of-evidence review) を試みた。更に、ラット TDAR 法の KLH による immunization がリンパ球サブセット検査を含む血液学検査や胸腺、脾臓重量に影響を与えないことを我々は確認した。ラットにおいて同一動物を用いて TDAR 法とともにリンパ球サブセット検査と病理組織学検査を行うことは有用と考えられる。

(以上、全て筆頭発表者のみ掲載)



株式
会社

ボゾリサーチセンター